

## 星槎大学機関リポジトリ

<b>Title</b>	【資料】 アクションリサーチをめぐる研究動向：アップルヤード『教師の能力開発』とラシュトン他『教師の省察的实践』を中心に
<b>Author(s)</b>	三輪建二
<b>Citation</b>	星槎大学大学院紀要 = Seisa University Research Studies in Education
<b>Issue Date</b>	2020-3-14
<b>URL</b>	<a href="http://id.nii.ac.jp/1486/00000178/">http://id.nii.ac.jp/1486/00000178/</a>

資料

## アクションリサーチをめぐる研究動向

### —アップルヤード『教師の能力開発』とラシュトン他『教師の省察的実践』を中心に—

三輪 建二<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>星槎大学大学院教育実践研究科)

#### 1. はじめに

教育実践研究科では、「教育修士（専門職）」という修士号とは異なる専門職学位を提供しており、したがって修了要件となる学位論文も、修士論文に代わる「課題論文（プロジェクト研究）」となっている。教育実践研究科の大学院生の多くは、教師や看護関係者、NPO職員などの対人関係専門職であり、職場や各業界での課題を研究テーマとし、研究成果を職場や業界に還元しようと努めている。このような実践的な研究が奨励されているが、一方で、課題研究の質（実証性や厳密性）を担保するために、論文指導ではアンケートなどの量的研究やインタビューなどの質的研究を奨励することが多い。

研究方法として、自分の実践の研究するアクションリサーチを取り入れる場合でも、論文の質保証として、実証性や厳密性が求められている。そのため、日本におけるアクションリサーチの多くは、大学教員などの学術的な研究者が、実践者である対人関係専門職とともに行う実践研究とされ、実践者は研究者との「共同研究者」「研究参加者」の位置づけになることが多い（ストリンガー 2012、山内 2019、矢守 2010、2018）。それに加えて、アクションリサーチの研究対象も、実践者自身のもの（秋田 2010）は多くなく、むしろ対人関係の相手（生徒・学生・新人看護師など）であることも少なくない。教師の提供する知識・技術を生徒がどの程度理解しているのかを、生徒の学びの省察と成長を通して明らかにする研究（酒井 2007）、修得した知識・技術を病棟の患者対応で発揮できているのかをカンファレンスを通して明らかにする研究（筒井 2010）などである。著者のなかに大学教員など学術的な研究者が含まれることも、こうした背景にあるのであろう。

とはいえ、対人関係専門職が自分の実践能力の向上を図る場合には、対象者の研究だけでなくみずからの教育・指導に関する研究を展開することも必要なのではないだろうか。

アクションリサーチは対人関係専門職が「実践的な研究者」になるのに必要な研究であると位置づけ、量的研究と質的研究に加えて課題論文の研究法に位置づけても良いのではないだろうか (三輪 2018)。筆者は以上のような関心から、2つの翻訳書を刊行している。

- ・ N & K・アップルヤード著、三輪建二訳 (2018) 『教師の能力開発：省察とアクションリサーチ』 鳳書房 (以下 [アップルヤード] とする)
- ・ I・ラシュトン、M・スーター著、三輪建二訳 (2018) 『教師の省察的实践：学校教育と生涯学習』 鳳書房 (以下 [ラシュトンほか] とする)

著者のアップルヤード夫妻およびラシュトン、スーターは、学校や企業での豊富な実務経験を経てカレッジや大学の教員となった方々である。本資料は、2つの翻訳書の内容を中心に、対人関係専門職にとってのアクションリサーチの意味を解説するものである。

## 2. プラスの自己認識と自己肯定感

アクションリサーチについては、[ラシュトンほか] は第6章「省察的实践を広げるアクションリサーチ」で、また [アップルヤード] は第9章「アクションリサーチにおける省察的实践」で、定義づけをおこなっている。

アクションリサーチは、教師が自分の役割について考えを広げ、自分の実践能力を〈改善〉する目的を持ちながら、みずからの能力を批判的 (根本的) に省察することを意味する ([ラシュトンほか] 86頁)。

(アクションリサーチは) 実践者がある社会状況のなかで、実践の合理性や正当性を改善するために、またこれらの実践や実践がおこなわれる状況を理解するための自己省察的な探求携帯である ([アップルヤード] 158頁)。

アクションリサーチの定義はほぼ同じであるが、ねらいについてはやや違いが見られる。[ラシュトンほか] は、第3章「省察的实践のレベルとモデル」にあるように、対人関係専門職を土台にしながらも、教育機関の現状や生涯学習分野の教育政策など、対人関係専門職の外部の「社会的文脈」にも関心を置こうとしている。これに対して [アップルヤード] の第4章「省察的实践と自己認識」は対人関係専門職個人に注目して論じている。対人関係専門職自身のパーソナリティ、自己認識、信念、価値観、さらには、D・ショーンの「シングルループ学習」(問題の発見と問題解決が直接につながる学習) と「ダブルルー

プ学習」(問題解決の前に、自分の行為を導く価値観、信念、前提そのものを問いかける学習)のズレという論点を提示するのである。[アップルヤード]は次のようにまとめている。

自分を省察するプロセスでは、開放的(オープンマインド)で自分に正直であることが必要となる。その経験は必ずしも心地よいものではない。しかしながら、実践の改善という報酬が手に入るし、自信、柔軟性、自分の行為や発言への自己コントロールの機会が増えていくのである(72頁)。

[アップルヤード]は、4名の教師の実践事例を通して、自己認識を省察するプラスの意味を明らかにしていく。たとえば、シアはカレッジで美容セラピーを教える教師であり、自分の教え方について、失敗のほうに目を向けがちな傾向があるという。彼女は教養を高める目的で専門とは異なる「地方史」講座に学習者として参加する。そこで、準備万端でレベルの高い授業を展開するガイの授業展開に感心する。とはいえ、準備が徹底しすぎて学習者に注意を払おうとしない彼の進め方にも疑問を持ち、そこから、自分の授業には「仲間スピリット」があると、みずからの教授活動のプラス面に気づくようになっていく。

今まで私は自分の否定的な側面しか見てこなかったし、今回のようなよい点を心に留めることはしてこなかった。いったん、よくないポイントに焦点を当ててしまうと、それを心のなかから締め出すのは容易ではない。……今回のように、学習者としての経験を持つことで、自分の教授活動のよい面を再認識し、思った以上により仕事をしていると思えるようになった(61頁)。

### 3. 対人関係のトラブルをめぐる省察

[アップルヤード]は上記のように、個人の「自己認識」を省察することの意義をふまえた上で、第5章「省察的实践——コミュニケーションとマネジメント」では、対人関係の相手とのコミュニケーションやマネジメントでのトラブルをめぐる省察を取り上げている。実践現場で問題行動を起こすと考えられる参加者たちに翻弄され、悩んでいる対人関係専門職の事例は、私たちにとっても他人事ではないだろう。しかし、相手である生徒や学生などにかかわる問題であっても、ここでの省察の対象は自分になっている。

たとえば農業系カレッジで識字教育を担当するアーリーンは、積極的に学ばない学生と対立している。省察的なジャーナルをつけていくうちに、「遅刻する学生を問いつめて良い」とするメンタルマップ(ものの見方の枠組み)の存在に気づき、学生の声に耳を傾けよう

と考え始める。そして、馬好きの学生の関心をふまえた授業を行うようになっていく。

はっきりわかったのは、彼らがカレッジに来るのは心から馬が好きで、馬について、馬の飼育法について学びたいと考えていることだった。学生の関心を占めているのは馬であり、授業に参加し、読み書きを学ぶことは優先順位としては高くなかった(91頁)。

自分の教え方について悩んでいたローリーの事例でも、省察を通して、頭では「学習者中心の学習法」を身につけていたと思っていたが、実際には教え込ばかりであったことに気づく様子が描かれる(84-85頁)。これらの事例を読むと、トラブルの相手をあれこれ批判することよりも、自分の「メンタルマップ」、信奉理論(頭の中で信じている理論)と使用理論(実際の実践で使用している理論)のズレについて省察するほうが大事である点に気づかされる。著者は、以上のようなキー概念を用いつつ、次のようにまとめている。

学習者とのコミュニケーションを省察することで、あなた自身の学習へのアプローチ、実践、学習者や同僚教師との関係をめぐるいくつかの重要な洞察を得ることができる。あなたは積極的で省察的な関係づくりができるようになり、学習者を活気づけ、動機づけることができるようになり、学習活動や行動を把握できるようになる。こうした洞察が意味を持つのは、それによってあなたは継続教育分野の教師としての能力開発が進むからである(92頁)。

#### 4. 同僚との協業と省察的なジャーナル

自分の実践そのものを省察的に研究するアクションリサーチにはつねに、個人的で主観的であり、実証性や厳密性が欠如するという批判が付きまとっている(松崎ほか 2015)。

この点について〔ラシュトンほか〕は第4章「協働の省察的実践」において、対人関係専門職が、同僚の参与観察とアドバイスを通して、実践をめぐる省察と改善をくり返すことは、実践の根本的な理解と、実践の質の向上につながりうる点を強調している。

協働の省察的実践とは、教授活動や授業を参観し、ともに話し合うことを意味している……。協働の省察的実践を通して入手できる情報には、〈ほかの教師が用いる教育機器〉〈化学の授業でのきめ細やかな進め方〉〈新しいチャレンジのための戦略〉〈授業参加者の社会的背景を批判的〔根本的〕に理解する〉といったことがらがある(53頁)。

〔ラシュトンほか〕は協働的なアクションリサーチができる仲間として、組織の中では、専門教科を教えている仲間、学習プログラムの担当者、教師集団を、自分の組織外ではほかの教育機関、ステークホルダー（利害関係者）などをあげている（54頁）。実証性や厳密性の保障という説明ではないが、協働的なアクションリサーチにより、一人よがりな判断を免れ、研究成果が広く普及されるという考え方が示されている。

〔アップルヤード〕の第9章「アクションリサーチにおける省察的实践」でも、ケートが、同僚ミラの参与観察とアドバイスを通して省察的实践を進める事例を紹介している。ケートは継続教育カレッジでビジネス技能を教えている。彼女は授業では、学生たちに自主的な発言を行うよう指導していたつもりであった。しかし学生からは、「(私たちを)見守ってほしい」と言われ、その理由を省察しはじめる。省察的なジャーナルをつけ、同僚のミラのアドバイスを受けるうちに、相手よりも自分の発言ばかりに注意を集中させた自分に気づいていく。ミラのアドバイスについて、ケートは次のように述べている。

彼女〔ミラ〕は、私の予想していないことも提案してくれた、私に語ったのは、チームミーティングでは、私はいつも何らかの貢献をしたいと心がけているようだったけれど……〔私は〕チームの学生たちに関心がなく、自分が発言することばかり集中していたようだった。彼女の意見はおそらく正しいだろう（168-169頁）。

省察的なジャーナルをつけることに加えて、同僚の参与観察とアドバイスを受けて省察を深めることの意味については、次の実証性・厳密性に関する議論へとつながっていく。

## 5. 実証性と厳密性

〔ラシュトンほか〕でも〔アップルヤード〕でも、アクションリサーチの実証性・厳密性をめぐり精緻な議論はなされていない。とはいえ両書ともD・ショーンの省察論を理論的バックボーンとしている。みずからの実践を展開し、省察し、改善された実践を進め、その実践を省察し、評価するという、実践と省察の往還を行う実践者は「実践的研究者」であり、実証性や適切性以上に「厳密性 (rigor)」は担保されるという考え方になっている（ショーン 2007 326, 341頁）。したがって自分の実践をめぐる省察を軸とするアクションリサーチは、実践者にとっての研究にほかならないという考え方があるのであろう。たとえば〔アップルヤード〕は、研究というと先行研究や文献を読み込むこと、調査を実施すること、レポートをまとめることを思い浮かべることが多いが、実践者にとっては、「あなた自身の行為に向けられる」（158頁）ことも研究のひとつであると主張する。

研究法という点に関しては、ふたつの書物ともに、対人関係専門職が自分の実践を研究対象とするさいに、必ずしも特定の研究法（量的研究や質的研究）に依拠しなければならないわけではないという立場に立っている。自分の実践を研究対象にするのは主観的になるという批判もあるが、アクションリサーチには自分の実践を、①省察的なジャーナルで批判的に省察し、②同僚のアドバイスという協業により改善するプロセスがあり、研究に必要な実証性や厳密性は担保されるという。アップルヤード夫妻にアクションリサーチの実証性や客観性についてメールで質問をしたところ、次のような返事があった。

実証性や客観性という点で言えば、アクションリサーチでは人びとはみずからを見つめること、自分の教授活動を研究プロジェクトそのものとして見ることが求められる。また同僚によるアドバイスを求めることもできる。こうした営みは、みずからを主観的な状況から分離し、客観的に見つめることに貢献するのである（メールによる私信）。

## 6. おわりに

2冊の書物からは、対人関係専門職はみずからの実践について、省察的なジャーナルや同僚のアドバイスをふまえたアクションリサーチを通して、自分の実践の改善と質の向上のほか、研究の実証性・厳密性も担保されるという考え方を学び、量的研究や質的研究に加えて、アクションリサーチを第三の研究法に位置づける方策を考えていきたい。

### 引用・参照文献（2つの翻訳書以外）

- 秋田喜代美. (2010). 「学校でのアクション・リサーチ：学校と野協働生成的研究」秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー：学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会、pp. 163-189
- 酒井朗. (2007). 『進学支援の教育臨床社会学：商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房
- D・ショーン著、柳沢昌一・三輪建二監訳. (2007). 『省察的实践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- E・H・ストリンガー著、目黒輝美・磯部卓三訳. (2012). 『アクション・リサーチ』フィリア
- 筒井真優美編. (2019). 『アクションリサーチ入門：看護研究の新たなステージへ』ライフサポート社

- 三輪建二. (2018). 「教師の教育実践研究論文をめぐる一考察：新しいモデル作りに向けて」『星槎大学教職研究』 第3巻、pp. 1-8
- 松崎登・飯田宏道・吉田美穂・蒔恵介・貴島耕平. (2015). 「経営学の科学的有用性：R問題の超克に向けた実践的取り組み」『経営情報学会 2015 秋季全国研究発表大会要旨集』
- 山内朋子. (2019). 「看護におけるアクションリサーチの研究動向」『看護研究』 Vol. 51, No. 4, pp. 316-321.
- 矢守克也. (2010). 『アクションリサーチ：実践する人間科学』新曜社
- 矢守克也. (2018). 『アクションリサーチ・イン・アクション：共同当事者・時間・データ』新曜社